

<http://www.womensoutdoornews.com/2017/02/vera-koos-memoir/>

Vera Koo's First Column in a Six-Part Series Inspired by the Writings in her Memoir

Vera Koo コラム 6 回シリーズの初回は回顧録からインスパイアされたもの

趣味は仲間と一緒に楽しむのがいいと言う人もいますが、私が射撃をする時はこれは当てはまりません。40代で射撃を始めた私にとっては、個人種目として競技していくものだと思っています。

私は、一人でガンレンジにいる時が落ち着きます。

他のシューター相手に競技して、ガンレンジで他のシューター達と会うわけなので、もちろん完全に孤立している訳ではありません。大会によってはチームの一員として競技します。でも詰めていけば、射撃競技はターゲットとあなただけが残ります。

私はそれが気に入っています。私にとって射撃というのは友達とレンジに集まってゴシップ話をする軽いものではありません。射撃は私にとって心と体を持って自己を注いで行く努力をするスポーツなのです。

私も人生経験を通して、皆時として誰かの助けを必要としていることは理解しています。射撃も同じくで、私は素晴らしいメンターや友人からたくさんのアドバイスをもらって、射撃のキャリアを今日のレベルまで持ってくる事が出来ました。

巨人の肩に立って先の方を見たら、このスポーツの分野で自分の恩師になってくれる巨人を見つけなくてはと思いました。

競技射撃を始めてから、私はこのスポーツについて何も知らないことを知ることになりました。



Jim O'Youngは私の最初のメンターで、今でも良き友人です。まるで運命により出会うことが出来たような気がします。

Jimはスティーールチャレンジ界の巨匠で、スピード、運動能力、正確さを兼ね備えています。

1991年にJimに出会った時、私は射撃のトレーニングコースを修了したのですが、無名シューターでした。ついこの間射撃を始めた私ですが、どう進むかガイダンスが必要でした。競技用のピストルを買いましたが、使いこなせていない自分がいやでした。

地元ガンレンジのオーナーに自分が抱えている問題を相談しました。するとJimに話をしてみるといいと勧めてくれました。Jimは毎週木曜日にこのレンジにやってくるのでした。

その日は水曜日でしたからJimがレンジに来るのは翌日になります。しかし私がレンジを去ろうとして反対方向を向くと、Jimがいたのです。

Jimに私が競技用ピストルについて抱えている問題を話しました。 Jimは気さくな人でした。 私の話を聞いて同調してくれた後、問題はピストルにあるのか、それともシューターにあるのか？と聞いてきました。

翌日、レンジでJimと再会しました。 私はマガジン2つ分撃ちました。 熟練のJimが見ている前でも自信を持っていました。 Jimがそのピストルを撃ちました。 Jimは問題はシューターにはないことを確認してくれました。 彼は新しいピストルを得る手伝いをしようとオファーしてくれました。

私は先を見越して考えないと思いました。 なぜなら、より良い道具が手に入ったなら、誰か教えてくれる人が必要になり、Jimはメンターとして完璧だと思いました。 彼は完璧なプロフェッショナルです。

一つ問題がありました。 Jimは私に生徒は取っていないと言いました。

しかし、私はノーと断られた訳ではないと簡単には諦めませんでした。 Jimの練習の様子などを見学して学ばせてはくれないかと頼みました。 彼は諦めて、彼のレンジでの練習などを見学させてくれるようになりました。 ようやくJimは私にピストルを持ってきて撃っていいと言ってくれました。 間もなく彼は私の先生、メンターになりました。 Jimは私に指導してくれました。 私が出席すべきワークショップを教えてくださいました。 試合にも連れて行ってくれるようになり、時にはチームメイト枠にも入れてくれるようになりました。

Jimと私は友達にもなりました。

友達は時に絶妙なタイミングで、意識せずに役立つ言葉をかけてくれたり、思いやりのある行動を取ってくれます。

数年前、ミズーリ州コロンビアでビアンキカップへ向けて練習をしている時、転んで脚が螺旋状骨折となり回復中苦しんでいた時など、幾度となく本当だと友人について思いました。

負傷して二ヶ月後、Jimはカリフォルニアの私の自宅までお見舞いに来てくれました。 彼は、私が練習が出来ないことで復帰に際し不安になっていることを知っていました。 翌年5月にはビアンキカップに復帰したいのに、まだ回復途中で気がおかしくなりそうになっていました。 気休めにと、Jimは私の夫のCarlosに裏庭にエアピストルの小さなレンジを設置するようアドバイスをしてくれました。 コロンビアのレンジとは違いますが、射撃に関わっていただけることは出来ます。

Jimは私を試す術を知っていました。 メンターをしてくれていた期間、私が不平を漏らした時は「辞めたいのか、続けたいのか？」と聞いてくれたものでした。 私は決して諦めませんでした。 私のDNAに諦めの文字はありません。

Jimは私のメンターを最長期間務めてくれた人ですが、その後何人ものメンターについてももらいました。 ジューターに限らず、ガンミス、レンジマスターなどもいました。 射撃というスポーツを独自のメソッドで私を指導してくれました。

競技射撃を始めてすぐにはビアンキカップに出場した訳ではありません。 でもビアンキカップが正確性を競うのが得意の私にとってぴったりだと思い、南カリフォルニア在住の元ビアンキカップ優勝者・John Prideに連絡をしてみました。 彼はMickey Fowlerがカリフォルニア州マリポサの牧場にトレーニングレンジを持っていると教えてくれました。



もしスティールチャレンジについて語るならJim O'Youngだと言うのなら、Mickey Fowlerはビアンキカップ4回優勝経験のあるシューターです。 彼の牧場にはビアンキカップのステージを模倣したものがあるのです。

MickeyはJimと同様、生徒は募集していませんでした。 しかし私はまたしても簡単に断られたと諦めませんでした。 1997年の2月、初めてビアンキカップに出場するためにMickeyの牧場まで運転しました。

Mickeyの牧場でIchi Nagataというシューターに出会いました。 私はMickeyの牧場で一人で練習することが多く、大抵最後に牧場のゲートの鍵をかけて帰っていくことがほとんどでした。

途中助け舟がやって来ました。Ichiに自分のスキルを見せた後、彼は練習に付き合ってくれることに同意してくれました。 Mickeyの牧場で、Ichiと彼の仲間はビアンキカップについて色々と教えてくれました。 受けたアドバイスは全て試して、自分に効果があったものは取り入れそれ以外は取り入れないという繰り返しでした。



私のビアンキカップのキャリアに於いて最初から今までIchiは私のメンターであり、アイデアを交換することのできるかけがえの無い友人です。

1997年ビアンキカップの後に表彰会場に行くように勧めてくれたのはIchiでした。あのような表彰会場というのは私が快適と思える場所ではなかったのですが、とにかく行ってみようかと説得されました。 会場で、新参加者の女性でトップシューターとのことで、表彰と賞金をいただきました。 私はあとでIchiに感謝の印としてお辞儀をしました。 Ichiがいなければ、私は当時のポジションとは程遠い所にいたことでしょう。 Jim O'YoungやMickey Fowlerそして私を手伝ってくれたたくさんの人たちにも同じことが言えます。

私が射撃というスポーツを始めた時、シューター同士競い合いはするのだけど、同時に同じコミュニティの人間で、互いに助け合うようにと教えられました。本当にそのとおりです。このスポーツの性質として、一種友情のようなものを生み出すのです。お互いに目をかけて助け合っていく必要があります。

結局私たちは皆時に助けが必要となるのです。あなたが普段誰の手伝いもせず、自分に助けが必要となった時、誰かに助けてもらおうと期待できるでしょうか。

私は個人射撃競技としてのスタンスは決して変えることはありません。私は一人で競技する方に自分の強さを見出しています。それと同時に、これまで出会いアドバイスを交換し会った人たちの存在なしでは今の私はここまでのスキルに到達はしていなかったでしょう。

私は、自分の努力だけでは、目指す価値のある場所に到達できないことを学びました。人は皆目指す場所に行くために、誰かの助けが必要です。このスポーツを通じて生きる上で大切なことがクリアになりました。